

第百八十話 日本軍政の特色

日米英蘭戦開始直後に、占領地域で軍政を施行した日本軍の「軍政」の実態がどうだったのか、所謂欧米列強並みの植民地政策だったのか、或いは戦争目的に鑑み欧米とは異なる政策が行われたのか等を知ることは、我が国と東南アジア諸国との関係を考える上で示唆を与えてくれる。（加藤裕著「大東亜戦争とインドネシア」を参考に）



1 南方占領地域、インドネシアの軍政概要

日本は、香港、比、緬(ビルマ)、英領馬來、蘭印で軍政を敷いた。日本にとって初のことであり、日米英蘭戦に先立ち、「南方占領地域行政実施要領」(1946/11/20)及び「占領軍政実施に関する陸海軍中央協定」を、1946/11/26に決定していた。

蘭印については、欧州よりも広大な島嶼地域を3つに区分して軍政を行った。即ち、蘭印の中心地ジャワ島は第16軍(今村大将)、スマトラは第25軍(山下大将)、ボルネオ含む東側は海軍が担当した。

占領地の治安回復、重要国防資源の急速獲得及び作戦軍の自活確保に資することが狙いであった。原地住民に対しては皇軍に対する信倚観念の助長、独立運動は過早誘発を回避、等が要点である。各地域の実情に沿った形で具体的な要綱を策定して実施した。

2 特色等

- (1) 住民は友好的・協力的であった。事前の宣撫工作の効果、住民が信じる予言を活用、日露戦争で西欧諸国に勝利した国に対する尊敬や関心、戦前各地で活動した日本人に対する親しみがその背景にある。
- (2) 日本軍の軍律の厳しさに対する信頼
- (3) 特に今村は軍中央から軟弱、寛大すぎるとの批判
- (4) 民族指導者の協力獲得 スカルノ、ハッタ等
- (5) 早期独立を期待する民族運動に対する政治参与への道～1945(S20)9月7日独立容認へ
- (6) 兵補(原地住民の補充兵)と郷土防衛軍(PETA)の育成
兵補の競争率は高かった。PETAは終戦時69個大隊、3.8万人に
- (7) 労務者の供出制度 南方各地での大量の労働力の必要性に対応して、機関を設置して募集・送出した。住民の自発協力を期待したものであったが、一部では強制的ロウムシャが戦争末期には重労働故に死傷者続出(泰緬鉄道等)、総数は22万人?
- (8) インフラ整備(根山トンネル等)、農業技術者派遣による農業指導、住民への医療奉仕等
- (9) 総括 3年余りの軍政の間、欧米の植民地政策とは一味も二味も違う軍政を敷き、住民も協力的ではあった。日本的なものの強要もあり、早期独立の夢も消え、戦局の悪化に伴い日常生活も圧迫され、対日感情は変化しつつあった。

<アンポンタン>の話 日本軍歩哨にお辞儀を忘れた村民に対し浴びせられた怒声に対し、「アンポンタン」と村民は謝った。旦那ごめんなさいの現地語だが、歩哨は馬鹿にされたと思ひ込み、更に厳しい怒声を発したと云う。(閑話休題)

3 反日暴動と住民虐殺問題

大掛かりな反日蜂起計画は事前阻止され、散発的な暴動は各地で起きた。カリマンタンでは、インドネシアの公式記録では2万人が虐殺とされているが、日蘭側の推計等では千数百人程度であり、一桁違っている。スマトラでは防空壕で労務者三千人が虐殺とされ、東チモールでは4万人が虐殺等は噂を史実と認定した?

4 B C級和蘭軍事法廷 一番死刑が多かった。復讐裁判そのものだ。

5 蘭印での戦没者7万～12万人と推定、各地に46基の慰霊碑が建立、その現状は?

* 異なる戦争目的達成に寄与する軍政の難しさ痛感。復員等に関しては、百七十四話参照。
(第百八十話 了)